院長室だより

川崎病や中耳炎が治った後、ワクチンはいつ接種する？

川崎病は、乳幼児に発症する5日以上持続する発熱、体の発疹、口唇(くちびる)などの粘膜の発赤、四肢末端の腫脹、頸部リンパ節腫脹を特徴する、原因不明の症候群です。日本の川崎博士が世界で最初に報告した病気で、川崎博士の名前をとって川崎病と呼ばれています。**この川崎病が去年から今年にかけて流行しています。**

中耳炎は、咽頭や後鼻腔に潜んでいるインフルエンザ菌や肺炎球菌が、ウイルス感染が引き金となって増殖し、後鼻腔から耳管を通り中耳腔に感染する病気です。最近、抗菌薬が効きにくい細菌が増加してきたため、耳鼻科の先生に頼んで鼓膜切開をする機会が増加しています。

川崎病や中耳炎にかかった子どもには、いつ頃ワクチンを接種すればいいでしょう?

日本でもアメリカでも、ワクチンを接種するのが適切でない時期として、「中等症から重症の病気にかかっているとき」という項目があります。そうすると、軽症の病気の時や熱もなく元気な時は、ワクチン接種が可能ということになります。

川崎病の時は、熱が引き、CRP(炎症のマーカー、高いほど川崎病が重たいと考えます)が陰性になれば、治ったと考えます。川崎病が治ったと判断されると、保育園や幼稚園の登園が許可され、集団生活が始まります。**保育園や幼稚園の登園が許可されたときがワクチン接種を再開していい時です。**不活化ワクチンならば、この時期から接種を再開します。

川崎病が治った後、ワクチン接種時期の判断が難しいのは、**静注用γグロブリン(IVIG)**の治療を受けた時です。IVIGの中には、ウイルスの増殖を抑制する免疫力(抗体)が含まれていますので、麻疹ワクチンや水痘ワクチンなどの生ワクチンをIVIG投与後の早い時期に接種すると、接種したウイルスが増えないために、自分で抵抗力を作ることができないことになります。**麻疹や水痘が流行していないときは、日本ではIVIG投与7か月後以降に、麻疹ワクチンなどの生ワクチンの接種を勧めています。**

それでは中耳炎の場合はどうでしょう？欧米では抗生剤を服用していても、中耳炎、上気道炎、胃腸炎の場合、熱がなければ、生ワクチンでも不活化ワクチンでも接種していいことになっています。**日本では中耳炎の病状が落ち着くまでは、ワクチン接種を延期する場合が多いです。**しかし、抗生剤を飲んでいても、元気で保育園や幼稚園の通園が許可されたならば、接種が可能と考えていいでしょう。**なお、中耳炎を繰り返す子どもは、肺炎球菌に対する抵抗力を作る力が、人よりもやや遅れて強くなる子どもと考えられます。このような子どもには、肺炎球菌結合型ワクチン(プレベナー®)の接種を勧めています。**

日本はワクチンの安全性について極めて慎重な国です。接種をしてはいけない発熱の基準も、日本では37.5℃以上ですが、米国では38.3℃以上です。この基準の違いは国民性の違いでしょうか？

(院長　庵原　俊昭)

三重病院 外来糖尿病教室

3月開催のお知らせ

3月の糖尿病教室は、3月21日(水)に
栄養部より震災非常食の紹介をする予定です。
詳しくは3月号でお知らせします。
乞うご期待!